

えほん👑世界のおはなし

インツスどうわ

杉田豊●絵 森山京●文



〈著者紹介〉

杉田 豊 (すぎた ゆたか)

1930年、埼玉県生まれ。東京教育大学芸術学科卒業。1979年「ねずみのごちそう」(講談社)で、ポローニャ国際児童図書展グラフィック賞および第26回産経児童出版文化賞美術賞を、1980年「うれしいひ」(至光社)で第11回講談社出版文化賞絵本賞を受賞。その他ブルーノ・グラフィックデザインビエンナーレ特別賞、イタリア切手芸術国際賞最優秀等受賞歴多数。現在筑波大学名誉教授。埼玉県在住。

森山 京 (もりやま みやこ)

1929年、東京都生まれ。コピーライターとして活躍のち、1968年「こりすが5ひき」で講談社児童文学新人賞佳作に入選。1996年「まねやのオイラ旅ねこ道中」(講談社)で野間児童文芸賞。おもな作品に「あしたもよかった」(小峰書店)「おるすにしつれいたします」(林静一・絵 講談社)など多数。神奈川県在住。

★

えほん^{世界}のおはなし⑨ イソップどうわ

N.D.C.726 32p 26cm

1999年10月1日 第1刷発行

絵◎杉田豊 (すぎた ゆたか)

文◎森山京 (もりやま みやこ)

A D◎坂川栄治

デザイン◎藤田知子 (坂川事務所)

発行者◎野間佐和子

発行所◎株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112-8001

電話/東京03-5395-3534 (編集部)

東京03-5395-3625 (販売部)

東京03-5395-3615 (製作部)



印刷所◎共同印刷株式会社

製本所◎大村製本株式会社

©Yutaka Sugita/Miyako Moriyama 1999 Printed in Japan (児幼)

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にておとりかえいたします。なお、この本についてのお問い合わせは児童局幼児図書出版部あてにお願いいたします。
本書の無断複写(コピー)は著作権法上の例外を除き、禁じられています。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN 4-06-267059-3

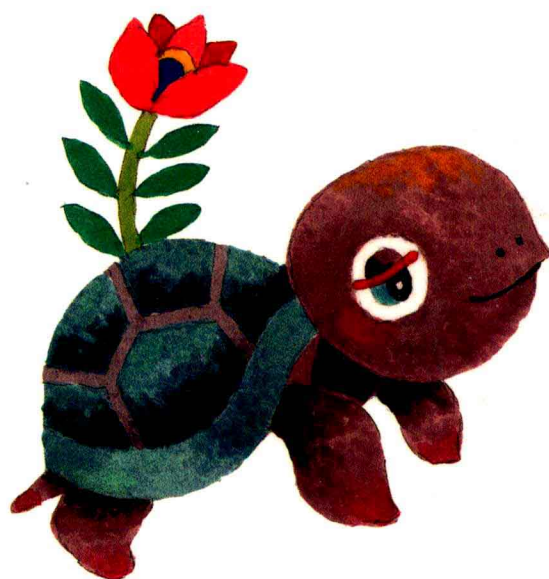
えほん  世界のおはなし

イソップどうわ

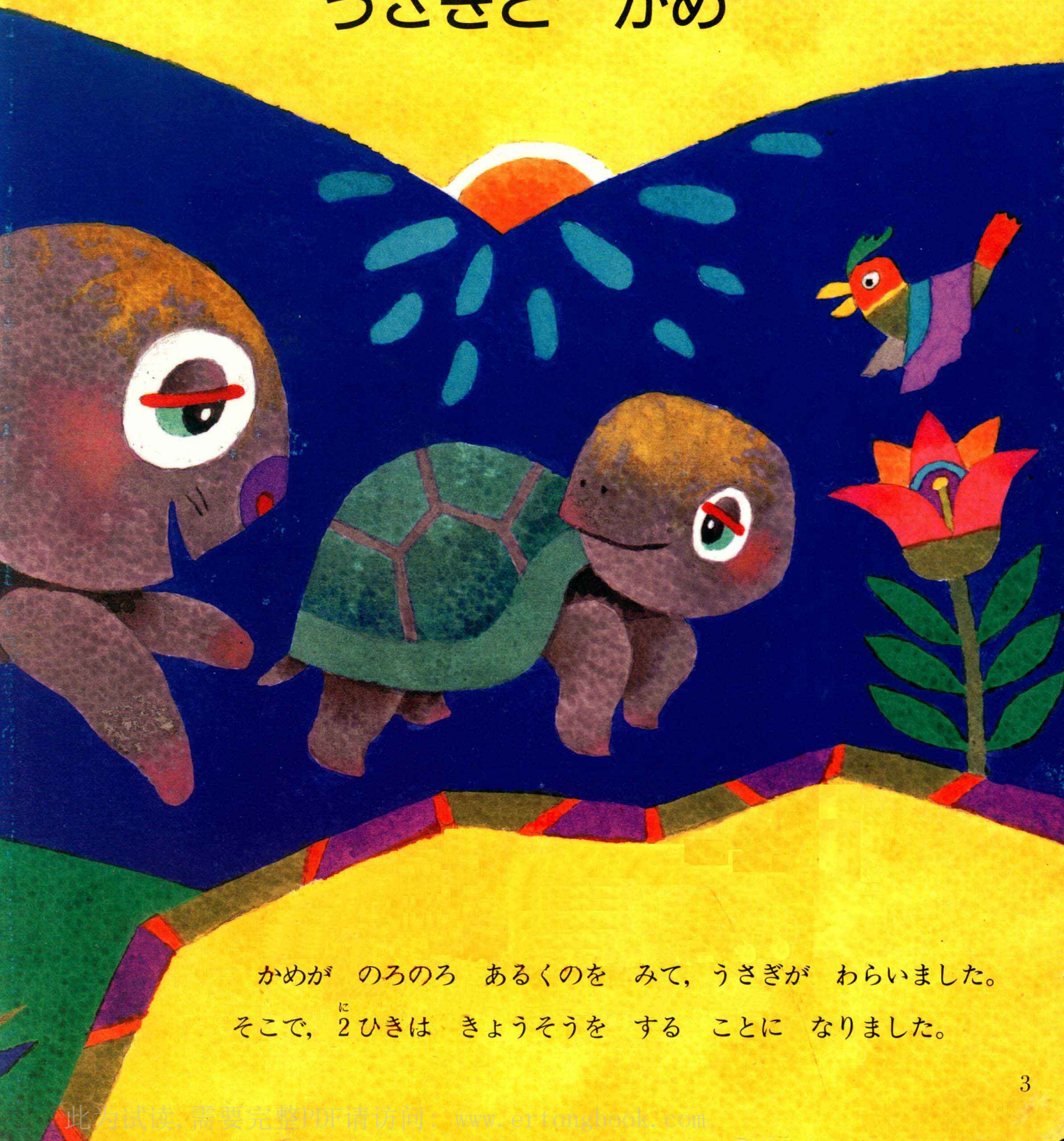
杉田豊●絵 森山京●文



江苏工业学院图书馆
藏书章



うさぎと かめ



かめが のろのろ あるくのを みて、うさぎが わらいました。
そこで、2ひきは ^にきょうそうを する ことになりました。

「よい、^{どん}ドン！」

うさぎは、すばやく とびだしました。

ぴよんぴよん ぴよんぴよん とびはねながら、^{くさ}草はらを すぎ、
おかを のぼり……。

しばらく いって ふりかえると、ずっとずっと うしろの ほうに、
ごまつぶのような かめの すがたが 見えました。

「かつのは、ぼくに きまってるんだ。ちょっと やすんで いくと しよう。」

うさぎは、みちばたの こかげに ごろり。

その まま ぐうぐう ねむって しまいました。





かめは、のそのそ すすみしました。

「ぼくの ^{あし}足は のろいから、やすむ わけには いかないんだ。」

かめは、いちども とまらずに、^{ごーる}ゴール めがけて てくてく てくてく。

ねて いる うさぎの そばを とおりすぎ、

いっしょうけんめい あるきつづけて、とうとう、

「やったあ！」

まもなく うさぎが かけこんで くと、かめは でむかえて いいました。

「やあ、おさきに。ぼくの かちだよ。」





ありと きりぎりす



なつ
夏の ごごでした。

くさ
草かげで、きりぎりすが ^{こえ} 声を はりあげて うたって いました。

そこへ、ありが ふうふう いいながら とおりかかりました。

みれば、からだよりも ずっと ^{おお} 大きな ^{ぱん} パンの かけらを はこんで います。



「おい、ありくん。ここへ きて、いっしょに あそばないか。
ぼくの うたを きかせるぜ。」

きりぎりすが、ありを よびとめて いいました。

「そんな ひまは ありませんよ。いまのうちに たべものを あつめて
おかないと、あとに なって こまりますからね。」

ありは そう いうと、さっさと いって しまいました。

「ふん、あきれた やつだ。この あついのに、
あせみず たらして はたらくなんて。」

きりぎりすは、ばかに したように わらい、
また たからかに うたいだしました。





やがて ^{ふゆ}冬に になりました。

ありは あなの ^{なか}中に こもり、のんびりと やすんで いました。

ある ^ひ日、そこへ やせおとろえた きりぎりすが たずねて きました。

「おねがいだ。なにか たべものを わけて くないか。」

「なぜ ^{なつ}夏の あいだに たくわえて おかなかったんですか。」

「そんな ひまは なかったよ。まいにち うたうのに むちゅうだったからね。」

「^{なつ}夏じゅう うたって いたのなら、^{ふゆ}冬は おどって くらしなさいよ。」

ありは、ぴしゃりと いい、^{とあ}ドアを しめて しまいました。



きたかぜと たいよう



空の^{そら} 上^{うへ}で、きたかぜと たいようが いいあいを はじめました。

「ぼくの^{ちから} 力は、たいようさんより ずっと つよいぞ。」

「いや、きたかぜさん。^{ちから}力が あるのは ぼくの ほうだ。」

「では、^{ちから}力くらべを しようじゃ ないか。あの^{みち} 道を くる
たびびとから、ふくを ぬがせた ほうが 勝ちだ。」

「いいだろう。では、きたかぜさんから
どうぞ。」

